

四手崎一羽右衛門が拓いた近世集落—

四万十川が曲流した突先に位置する四手崎。旧四手村の集落の一つで、中世に集落は確認できず、江戸時代の正徳年間（1711～1716年）に同じ十和地域の白井川から訪れた谷本羽右衛門^{はうえもん}によって集落が開かれたと伝わる。水の少ない集落で、その後も溜池や対岸の取水などさまざまな形で耕地開発が行われた。集落の下を流れる四万十川は、川下りの難所でもあり、鮎獲りの良い漁場でもあった。ここでは、村の歴史的景観と生活誌を記したい¹⁾。



四万十川沿いの四手崎集落

1、『地検帳』に見る村落景観

慶長2年（1597）に検地が行われた『長宗我部地検帳』（上山郷地検帳、以下『地検帳』）では、「（大井川内）四手村」の南端の耕地で、屋敷は確認できず集落はまだ未成立である。「シテノサキ」として、田7筆（下4、下々3）、切畑2筆、荒地1筆が検地されている。田は3代～30代と小規模なものばかりで、切畑（焼畑）が計1反25代2分と比較的大きい。聞き取りから小谷の水を利用した小規模な谷水田や湧水田の存在が推測できるが、田は屋敷地を伴う程生産性の高いものではなかったと推測できる。約1反の「シテノサキノ上」の切畑は小字「四手崎山」の切畑と推測される。土地所有は全て「上山分」で、9筆が小兵衛の作または扣（管理地）で、西端の3代の切畑1筆のみ兵衛次良の作である。

2、昭和期の村の姿

（1）地名

人と家の呼び名 集落では、年をとった男の人を「チャン」と呼ぶ。その関係で、家の呼び名が「上のチャン」「中のチャン」、「下のチャン」と呼んでいる。女の方は、名前の一文字を取って「～姉^{ねえ}」と呼んでいた。

大又山の天気予報 四手の本村の北東にある「大又山」の雲の動きで天気を占っていた。朝学校行く時に、「大井川」（西）の方に雲がいたら雨で、傘を持っていかないといけないと言われた。一方、「ヒノヂ」（東）の方へ雲がいたら天気と言われていた。

ガネ瀬 カニがすごく流れて捕れる。カニカゴを入れた場所。

コケの瀬 筏流しで岩があつて、筏からこけたりするのでそう呼ばれた。

ハゲダキ すごく山が立っていて何にも木がない場所。川までぼちゃん。

カジヤサコ 今でもミツマタが生えている。

ツイナシ なまって呼んでいるが、元は「露無」。お日さまが一番当たる場所。

神田 ジンデンは四手峠へ向かう峠道の上り口にある地名。どこの神田かは分からない。

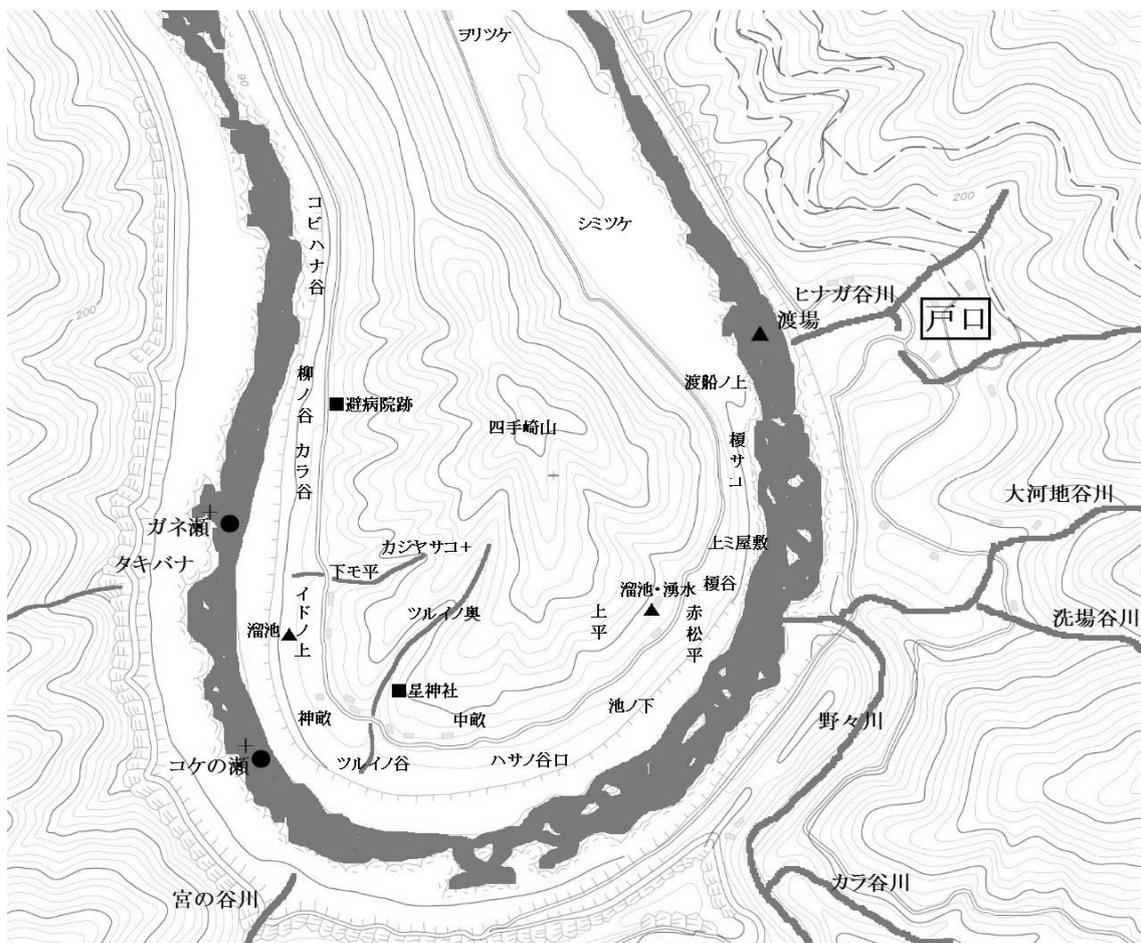


図1 四手崎の地名地図1

(2) 集落・宗教

羽右衛門の開発伝承 十川の白井川に「谷ノ本」という所があり、新井白石の時代に羽右衛門という人物がいた。鎧や烏帽子などを背中へ担いで朝集落を出て、ずっときよったところが山の中で日が暮れた。この時、人の家を借りて開墾を始めたといわれる。谷ノ本からきたから谷本になって今の谷本家に至るといふ。伝承からは、人家は少ないがすでに18世紀の段階で四手崎に人が住んでいたことが分かる。また白井川は大道の隣の山深い場所で、羽右衛門はそれに比べて開けた地を探して歩き、四手崎で開墾を始めたといわれる。江戸期の地誌類では四手村全体の戸数や人口しか分からないが、明治初期の『神社明細帳』には四手崎の氏神・星神社の氏子が17人とあり、まだ小規模な集落であったことが分かる。

インフラ整備 集落に電気が付いたのは昭和12年、5軒ラジオを買ってくれたら電気を付けてくれるといふので、20軒がラジオを持っていた。テレビが来たのは昭和37年。

羽右衛門神社 四手崎を開発した開発地主として、昭和50年代に谷本家の人達が提案して祠を建ててまつるようになった。星神社の祭りの後、1月20日に集落の皆が集まり羽右衛門をお祭りしている。夏と秋にも祭りがある。その子孫かと思われる谷本の本家筋には、鎧

や烏帽子があった。戦後すぐの頃には、畑でその鎧がカラスのおどしに吊されているのを見たことがあるが、その後それらの品は捨てられたようだ。

児島さま 老朽化して新しく作り変えた。家の裏、「ツイナシ」にある。南北朝期の武将・児島高德を祭った神社。『神社明細帳』には記載がない。

大師堂 昔から4月第1日曜に掃除に行く。子どものミニ八十八カ所があったが破れたため、昭和50～60年代に周辺4集落で寄付する人を募り、お地蔵さんを新しくした。

お日待ちさん 旧暦9月23日(新暦10月～11月)に五穀豊穡を願って行う年中行事。集会所ができるまではとおやの家でやっていた。羽織袴姿で、日が沈む夕方からお日さまができるまで行う。太夫(昔は昭和から、現在は黒住教の太夫)もそこで泊まる。お腹がすいた時の備えの米をたいて雑炊にする²⁾。

(3) 生業

戦後の水田開発 田んぼは谷田が「ツルイノ谷」にある。低地部は湧水が湧くので池にして、昭和30年頃まで溜池の水で田んぼを作っていた。戦後、近隣同士で畑を田にしたが、水がないので、四万十川を挟んだ対岸の谷から水を引いた。村会議員をしていた谷本伊作が最初にやったのが、竹藪から孟宗竹を切ってきて、金の棒で穴をくって



図2 四手崎の地名地図2



対岸から取水するビニールパイプ(矢印)

何本も組み合わせて針金でくくったものを対岸の谷から四手崎まで渡す方法。水を引いたら、池をつくって、余り水を貯めた。昭和30年代後半以降は、黒いビニールパイプに変わったが、凍って冬は割れて破損するので、なんぼお金がいったやら分からん。

四手崎の生業 牛は黒牛を飼っていてユイで2～3軒で使い、田んぼをかいた。湿田が多く田の畦に大豆や小豆は作っていなかった。畑では麦、ソバ、キビを作った。焼畑はやっておらず、カジヤミツマタも作っていなかった。原木シイタケは戦後山で。養蚕は年に4回飼い、道から下は桑畑だった。中学出たら男は親子で出稼ぎにいくため、女ばかりしかおらず蚕を飼った。蚕糸がいかなってから桑畑は田畑にした。出稼ぎは山師で奈良県吉野の下北山へほとんどの人が行っていた。炭焼山は、個人でツイナシや大保木など数箇所があり、炭をリアカーで出荷をしていた。百姓の他にリアカー引き(車引き)をしている人は多く、自分や他人の木を往還まで出し、製材所へ運んだ。

川漁と魚料理 鮎の火振漁は世襲で漁業権があり、漁の時は集落の各人が番号を書いたく

じを引き、網を入れる場所を決める。やるたびにくじを引き、不公平がないようにしている。鮎は塩焼きの他、乾燥してカンツケに。塩漬けの干物にして、重しをして日干しする。乾燥鮎は結構高く、10匹を藁で編んで業者に売った。欲しい人にも売るし、隣近所にも分けた。ウナギはコロバシにミミズ餌で捕るほか、水が出た時は岩の中に入ったウナギを虫眼鏡で覗いて突いて捕ることもあった。醤油、砂糖で蒲焼きに、白焼きで食べることもあった。川エビは、ミソとニラ、赤土、米ぬかをつぶして団子にして餌にして川へ放る。赤土を入れるのは沈まないようするため。岩の中から出てくるので、しっぽのほうから「えびたま」でしゃくって捕った。エビはゆがいて食べる。胡瓜と煮る、塩振って焼いても食べた。カニは、川の瀬へ八の字に石を置き、その先にカニカゴを沈めて、船で引っ張り上げる。餌は釣ったハエンボを入れた。カニはガニミソに、菌が出た事もあり漬けられないこともあった。また、カニをゆがいてうどんのだしにすることも。足が大きいカニは子どものおやつにした。ウグイ（イダ）も近所に分けた。冬のイダは刺身に。4月初めのタチイダは、瀬に集まったのを投網で捕る。大きいのはおいしくなく、こまい（小さい）ほどうまい。

草山 草刈り場は個人で持っていて、牛の餌用の草を刈っていた。瓦葺きの家は戦前からあったが、カヤ葺きの家もあった。カヤ場は、野々川づけの山など日当たりの良い場所を共有し、順番でカヤを葺いていった。

狩猟・採集 集落に猟師がいて猪や鹿、ウサギ、ムササビ、鳩、キジなどを打って捕っていた。山の木のない所や草原、石垣などに生えるゼンマイは換金作物だった。山栗を植えていてお金になった。柿は山の仕事のおやつだった。

（3）交通・流通

曳き船 四手崎と戸口を渡す渡場があり、曳き船をワイヤーでつないでいた。四手崎集落には戸口に田んぼを持っている人がいて使っていた。戸口の田は昔から持っていたものではない。船の管理は戸口側で、船を渡す当番がいたが、専任はいなかった。

筏師 戦前まで行われた四万十川河口まで材木を流す筏流しで、筏師をしている人も集落にはいた。農閑期の季節労働で、梅雨の時期の田植え前までや、蚕の時期、秋の麦刈り前などに筏に乗っていた。北ノ川の奥で営林署の官材を切り出してきて、大水が出た時に谷を流して四万十川河口の消防署があるあたりまで出してくる。大道からも久保川口の河口まで出してくる。筏を組んで何艘かつないで、北ノ川や轟、戸口、四手崎などが2人組になって筏に乗る。北ノ川が一番筏、二番筏は久保川口など下流に行くに連れて筏が連なっていった。衣装はヒノキの笠、はっぴ、腰巻き姿、何艘かつないだ前に1人（「飛び口」）、後ろに1人乗って櫂をかつぐ。そこから、江川崎を経て河口の下田まで乗っていく。流す材は杉やヒノキの官材、筏師の賃はよかったらしい。下田に付いたら、歩いて十和まで帰ってきていた。行き帰りで1週間～10日間かかった。父親が中村の町で子どもにあめ玉などお土産を買ってくるのだが、母親は「あめ玉は食べてしもうたら残らん。本は読んで頭いれたら一生残る」と言うので、一寸法師や桃太郎などの絵本を買ってきてもらっていた。

行商 愛媛からイリコ、キビナゴを担いで売りに来た。ジャコに汗がしんでいた。和紙の袋

に入れて買い、蔵の中に入れておいた。ガイダ（虫）がわくとそれまでだった。出汁やおかずに使った。

（４）牛市と避病院

牛市とともに 昭和 37 年に十和の久保川口に牛市（家畜市場）が作られた³⁾。その競り人が自分（谷本芳清）。生まれ故郷の土佐町農協で人工授精師の免許を取った後、試験なしで十和村役場へ入り、牛市の創設・運営に関わった³⁾。当時免許は、高知女子大で学科（人工授精学や生理学）を受け、実地は窪川の農業大学校で旅館とまって 3 日実習して取る仕組みだった。十和ではそれまで大井川の人が種付けをしていたが、昭和 37 年からは自分が種付けに回った。雄牛は宇和島や高知から来ていたが、後に凍結精液に。精液は県畜産課から車で積んで持ってくる。事務所の冷蔵庫で保管したら 1 年ぐらいいは持った。種付けは 1 回つけたらいくらか料金制。雌牛が鳴き出したら発情開始で、農家から電話がかかってきて農家へ凍結精液を持って行く。やせちゅう、こえちゅう、年がいつちゅう、若い、タイミングなど付きやすい、付きにくいはある。色、状態など牛を見て判断する。1 日で 20 回くらい、2 年間で 400 カ所くらい農家を回ったこともあった。牛市は十和になく、種付けでできた子牛をどう売るのが課題で作られた。バクロウが家の庭先で子牛を買って牛市にかけた。愛媛や中村からも買いに来て、車で何十頭も買っていった。耕耘機が入っても続けられ、20 年ほどあったと思う。十和のためにはなんぼ犠牲になったか。

避病院の記憶 昭和 20 年まで四手崎にも避病院舎があった。ハンセン病は井崎からきて四手崎で広がったという話。院舎には男の人ばかりがいた。昭和 20 年の国による隔離で、患者が高松の大島青松園へ行く際、部落の人皆で「これが最後やき」と見送りに行った記憶がある。夜が明けんうちにリアカーで出て行った。見送りから戻って来たら、ホルマリン漬けてまっ白になるばあ消毒された。集落出身の人は青松園に 3 人いる。

（楠瀬慶太）

【註】

- 1) 2021 年 4 月に、谷本好美さん（昭和 13 年生）、谷本芳清さん（昭和 9 年生）に聞き取り調査を行い、現地踏査を行った成果の報告である。
- 2) お日待ちの日に、四手崎では念仏を唱えて踊る。踊りはお伊勢踊りで鉦、太鼓を叩き、くるりとぐるぐる回るという。厄除けの神事を同時に行うものだろうか。なお『十和村史』の年中行事の整理によると、お日待ちは宵と夜中と夜明の 3 回祈り、月天様を祭るのが祭事で、念仏や踊りの記述はない。
- 3) 『高知新聞』1962 年 12 月 8 日朝刊の記事では、十和村は山間農業の改善策として肉牛の肥育と子牛の出荷を計画・奨励し、昭和 37 年 10 月に村営の牛市場を開設。市では 1 頭当たり 1 万 2 千円～4 万 8 千円とこれまでの庭先売りより 1～2 割高で取引されたという。